

参りましたが、見る／＼中に糠を見たやうな雪、雪の粗いのは東京から此の近在といふものは積りませんが、越後の方に参ると細を干切つて投げるやうな雪が降りますから、三日も降り通すといふと餘程大したものであります、そこになりますと當地などは糠を見たやうな雪でなければ積りませんから、積りましたところが大したことはございません、其の晩は珍らしくなかく／＼盛んに降つて居ります、斯かる夜と雖も政五郎は屈する色なく、金刀比羅へ参詣をいたして歸途、久保町へ掛つて参りましたのが四ツ少々過ぎであります、傍らの所を斯う見るといふと、軒の下に年頃三十恰好の婦人が癪に閉ぢられて、頻りに苦んで居る、其の傍の所に十歳ばかりに相成りまする女の子が頻りに介抱をいたして居ります、政もしお内儀さん、貴方はどうかenasすつたのかい、女「ハイ、政ア、ひどく苦しいやうだが、癪でも起たのかい、女「ハイ、政」どうも餘まり寒さが強いところに、夜更けて斯んな所を彷徨つて居るから、詰り斯んなことになるんだが、困つたもんだねえ、女「ハイ、政」何處のお

方だい、女「ハイ、どうも誠に御親切様でございまして、能くお尋ね下さいました、お見受け申しますれば、まだお年も若いのに、情けある唯今のお言葉、私は京阪の者でございまして、此の娘を連れ、親子三人常地へ稼ぎに参り、ツイこの先きに宿を取り、稼ぐ間もなく夫の大病、僅な金は使ひ果して仕舞ひまする、頭の物から衣類まで賣盡くして仕舞ひまして、丁度三月の長煩ひ、宿にも餘多の借が出来まして、如何はしやうかと按じて居りますところへ搦て、加へて今宵に相成りまして、宿の主人が金が出来れば唯ツた今出て行けといふ邪慳の言葉、この大雪に病人を連れ出すこともありませんゆゑ、宛もございませませんが、金策をいたして参りますと、出は出ましたが此の寒氣、思はず持病の癪氣のために、これへ倒れ此の娘に看病をさして居りますが、どうすることも出来ず途方に暮るばかりでございまして、政「それはどうも誠に困りだらう、聞いても涙の翻れる話だが、私は芝口二丁目の者、今金刀比羅様に参詣をして歸途、お前さん方に會ふといふのも何にかの縁といふもの、

本来ならばあなた方親子三人お引取り申して、お世話をして上げたいが、私のお家にも生憎取込があつて、今お引取り申してお世話をするといふわけにもいかないから、これは甚だ失禮だが、どうか納めて下さるやうに」と、手早く懷中からいたして、懸け守のやうなものを出しまして、中よりいたして小粒を五つ六つと、着て居る衣類を脱いで襦袢一枚になつた女アレ、貴方なにをなさいます』といふ中に政「イヤ、これはお前さんに上げるのではない、此處に居る姐さんに進げるのだ、この着物とこの金を持って、これから宿に歸つて、亭主に言譯をしたならば、それでも承知をしないといふこともあるまい、まア大病人とあれば、能く面倒を見てお上げなさい 女「貴方まア飛んでもない、見ず知らずのお方から斯様なものを頂きましては相済みません、殊に貴方は襦袢一枚でお歸りになりましたらば、親御が必ずお咎めになりませう 政「イヤ、假令裸體で歸りまして、あなた方の話をしたら母は喜ぶとも叱ることはあるまいと心得ます、どうか納めて下さい 女「ハイ折角のお

言葉ゆる頂戴はいたしますが、貴方は芝口二丁目とばかりでお名前を仰しやいませんが、どうかお名前をお聴かせなすつて下さいまし 政「イヤ、名前を名乗るやうな者ではございません、又その中縁があつたらお目に掛けてお話をいたしませう、女「ではございませうが……」と留める袖を拂ひ退け、その儘雪を蹴立つて遙か彼方女「アレ……といふ間もなく、姿は見えなくなつて仕舞ひました、母娘は其の後影を見送つて、芝口の方を伏拜んで居ります、政五郎は襦袢一枚で我家に飛んで歸つて来た 母「どうしたい、えお前…… 政「阿母さん、これには譯がございます今上つてお話をします……實はこれく斯ういふわけ…… 母「ヲヤ、それはまア善いことをした、併しお前風邪でも引くといけない此方へ来て着物でも着たら宜からう」と母が何にかと世話をいたして呉れます、兄へも此の話もすると兄も共に喜びます、政五郎は翌日も相變らず日參をいたして、水業に怠りといふものはない、そこで當人の一念の届いたものであつたか、親父は程なく出牢に相成りまして、江戸搦といふこ

とになりましたが、其の後、弘化の三年五月、十二代の將軍家慶公の御代、大禮に付きまして御赦といふことになりました。江戸表へ歸りました、それから政五郎の兄松五郎に家督を譲り、遂に定右衛門は嘉永四年の四月中旬に相果てました、菩提所は築地本願寺の寺中の勝林寺といふのであります、これへ唯今以て其の墓標といふものか遺つて居ます、これは後のお話……扱て政五郎は文政の七年十八歳に相成りました、幸右衛門夫婦は娘のおてると政五郎を娶せまして、夫婦仲も至つて睦じく暮して居ります中に、實子の唯四郎をば除いて、自分が相續をいたすといふのを、政五郎はいたく心配をいたしまして、色々養父に迫りまして、遂に白魚屋敷の家は實子唯四郎に相續させるやうにいたしました、養父は八丁堀坂本町に隠居をいたし、政五郎は日本橋區榎正町に分家をいたしました、後年箱屋町に住居したのであります、爰で相摸屋政五郎と名乗りまして名前を揚ます、さて政五郎は養父のために大喧嘩をいたしますお話は、一ト息いれて次席に申上げます、

第二席

相摸屋政五郎は女房おてるとの間、九人の子供がおりまして、長男を仙之助といひ多病のために別家をいたし、長女をおはるといひまして、本石町の頭取で、濱松屋、淺尾伊兵衛といふ、俗にい組の伊兵衛といひます者の妻になり、二男道之助は家を相續いたして箱屋町に住ひ、先年鬼籍に入りました、次女はおてるといひ、芝露月町の芭蕉齋甚五郎の妻となりました、三女はおとくといひ、新川の鹽船持の廣屋正次郎といふ者の妻になりました、四女は早世をなし、五女はおろくといひ、藤堂家の御川達富永屋次郎兵衛の妻となりました、六女はおてるといひ、故人三代目澤村田之助の妻になりました、三男は新八郎といひ、實家の大和屋を相續いたしました、茲に天保の八年政五郎が三十歳の時に、長男仙之助は七歳、次男道之助は二歳でございます、頃しも六月の初旬、養父の幸右衛門は、手代の由次郎といふものを連れまして、飯田町の消防夫屋敷まで用達しに参りました歸りがけ、雉子橋御門

外に掛つて参りますると、厩の前の所、道の片傍、薄縁を敷き、この所へ手廻り人足三十七八人、今を盛りと酒宴をいたして居ります、ところがソヨク風の來るために手代の由次郎は、右の手に扇を持つて居りましたのを、左へ持直して、懐中から汗拭を出して、今汗を拭はうとする折りしも一陣の風のため左に持った扇が落ちますると同時に、傍に居た厩仲間の頬の所にビタと當つた 甲「ヤイ、唐碌人め、なにをしやアがるんだ 由「まことに濟みません 甲「濟みませんぢやアねえ、この野郎人を馬鹿にしやがって、汝の持つてる扇を落すなんて、落したんぢやあるめえ、乃公に遺恨があつて投げやがったんだらう 由「イヤ、飛んでもないことで今風のために思はずそれへ落しましたんで、飛んだ失禮をいたしました、どうぞ御勘辨を：

： 甲「ヤイ、勘辨ならねえ、汝のやうな奴は打擲て呉れなくツちやア懲りねえんだ、斯うしてやる」といふと、いきなり拳を以て打つてかゝる 由「アレ、何にをなさいますといふ中に一同「ソレ、やつて仕舞へ」といふので、其處に寄つて居る人足一同

立上がるが否や、右と左から拳を固めて打つて蒐る、彌が上に重なつて参りますゆるに、由次郎は右にこれを拂ひ、左にこれを拂つて居る、幸右衛門もこれを制しまする中に、なかく聞入れませんで、果は幸右衛門の周圍を取巻いて打つて蒐る、亂暴とや言はん、無法極まりないわけであります、兩人は必死となつて彼方に逃れ、此方に逃れして居りまする中に、ポツリ／＼と降つて参りました雨、今まで月が出て晴れ渡つて居りましたのが、俄に降り出して参りました雨と諸共に、ゴロ／＼ゴロツと雷鳴激しく相成つて参ります、次第に雨は盆を覆すやうに降つて來る、愈々電光眼に焼金を差すやうな有様、雷鳴轟き渡つて來る中に、ガラ／＼といふ霹靂一聲、幸右衛門の横手の方に落雷いたしました、人足共は此の雷のためにアツと驚いて算を亂す、幸右衛門は傍らに氣絶をいたしました 由「元締、氣を確に持たなくツちやアいけません、元締、確乎りなすつて下さい、元締エ／＼ 幸「誰れだ 由「由次郎でございます 幸「どうした、由次郎どん 由「飛んだ災難でどうもあんな亂暴な

奴等に會ッちやア叶ひません、併し私を擲ッて逃げまする時に、乃公の名前を名乗ッて聞かせやう、乃公は神田白壁町、仙臺屋與五郎の乾兒、金時の平六といふもんだ、能く乃公の顔を覚えて置けといッて、向ふに逃げて参りました、相手が知れなけれアどうすることも出来ませんが、向ふから名乗ッたこそ幸ひ、又仕返しも出来ますから、御心配は御無用でございます、幸ン、さうか、仕返しは兎も角も、今の落雷がなはれアすんので、爰で打殺されて仕舞ふところだッた、天の祐といふのはこゝらを言ッたものだらう何をいふにも由次郎、乃公はもう歩行けない、由さうでせう、私は仔細はありませんから、貴方を駕籠に乗せて、お宅まで送るやうにいたしませう」と、取敢へず此の場を去りまして、辻駕籠を眺へて参りまして、幸右衛門を駕籠に乗せて、阪本町の隱宅に送り届けることになりました、由次郎は立歸りまして此の段を家に居る乾兒に具に話をしますと、その中で六造といふ者が、聞くや否や榎正町の政五郎の家に來て六〇さて元締、大變なことが出来ました政何

だ六〇實は大きい元締がこれ〇斯ういふやうなわけで、今駕籠で歸ッて來ました政「エッ……さうか、相手は知れて居るか、六〇今由次郎さんから話を聞きましたか、兎方が運の盡きといふのでありませう、擲ッて逃まする時に、乃公の面を能く見覚えて居る、神田白壁町仙臺屋與五郎の乾兒、金時の平六といふものだと名乗ッたさうです、政「さうか、野郎が名前を名乗ッて見れば確なものだ、これから乃公が仙臺屋に行ッて來る、六〇元締が出懸けるなら小哥も一つお供をしてえもんです」これを奥に聞いて居た若い者が一回「元締、貴方がおいでになるなら、小哥共もお供します政「イヤ、それはいけねえ、理不盡に向ふに乗込むと、却ッてひけを取るやうなことがある、乃公が兎に角先方に行ッて、一應仙臺屋に打附ッて、何んといふか知らねえが、仙臺屋が手を突いて詫びるといふことになッたらば、兎に角穩かに濟ませるやうなことにしやう、野郎が知らねえとか、趣意を立てることが出来ねえとか言ッた以上は、其の時には来るか反るかやる積りだ、喧嘩はいつでも出来る、まア〇

乃公が歸るまで待て」と、騒ぎ立てるところの乾兒一同を止めて置きまして、取敢へず當人支度をして、銀作りの一刀を帯んで、ブラリと飛出した、白壁町の仙臺屋與五郎の門邊に来て見ますると、寂寥として居ります 政「御免下さいまし ○誰だ い 政「へエ、相摸屋の政五郎でござひます ○これはどうも失禮しました、相摸屋の元締ですか、能くまアお入來なすつた 政「此方の元締はお在宅でござひますか、○「ハイ、元締は奥に居ます 政「どうか鳥渡お取次を願ひたいもんで、少しく伺ひたいことがあつて参りました ○「ア、さうですか、少し此處にお待ちなすつて……元締 與「何んだ ○「今あの相摸屋の元締が來ました 與「ア、相摸屋といへば樽正町の政か、兎に角此方に通したら宜からう ○「へエ……どうか此方にお通んなすつて…… 政「御免下さいまし 與「イヤ、これは能くお入來なすつた、何にか御用ですか 政「へエ、少うし元締に伺ひたいことがあつて参りました 與「何んです 政「外のことでもないんですが、實は坂本町の養父が、飯田町の消防夫屋敷まで用達に参りました

た歸りがけ、雉子橋の外で厩の仲間衆が、納涼旁らの酒宴の所へ通りかゝりまして、手代の由次郎といふ者が、持つて居た扇を落したのが、間違ひの原因になりました、皆さんのために袋擲きに逢ひました、それに付いて、其の逃げる時にいはれたのにやア、神田の白壁町の仙臺屋與五郎の乾兒、金時の平六といふのは乃公のことだ、能く面を覚えて居ると言つたさうでして、見れば元締が何にか養父に對して、お怨みの次第でもあつて、さういふことをしろと乾兒衆にお申附けになつたものですか、それとも又元締は何處までも知らねえといふお話でありますか、眞逆貴方の乾兒だといつて見れば、知らねえこともありませぬ、定めて私が來る前に此方へも其の話があつたものだらうと思ひます、外のお願ひぢやアありませんが貸元、名前を聞かなけりやア誰れ彼れを出して呉れといふことは小哥の方で言ひませぬが金時の平六だと名乗られて見れば、打遣つても置かれねえわけのもの、どうか平六といふ者を小哥に渡して頂くわけにやアなりませんか 與「何んだい相摸屋さん、お前さん

は小(わ)哥(ご)に何(な)んか理(わけ)由(ゆ)でもあ(あ)つて、そん(そんな)なこ(こと)を仰(お)しや(やる)の(のか)い 政(まさ)に理(わけ)由(ゆ)がある  
 とい(い)つて、今(いま)お(お)話(わ)をするや(や)うな理(わけ)由(ゆ)で、外(ほか)に仔(し)細(さい)はあ(あ)りませ(せん) 興(き)小(わ)哥(ご)は家(うち)に居(お)て  
 エ(エ)て、そん(そんな)な話(はなし)はお(お)前(まへ)さんか(ら)聞(き)くのが始(は)めて、小(わ)哥(ご)の乾(こ)兒(ごん)にや(や)ア金(きん)時(とき)の平(へい)六(ろく)なん  
 てい(い)ふ名(な)前(まへ)の者(もの)はね(え)え、そ(それ)は外(ほか)の者(もの)が小(わ)哥(ご)の家(うち)の乾(こ)兒(ごん)だ(と)か、何(な)ん(と)か言(い)つて名(な)  
 乗(の)つたか知(し)らね(え)えが、小(わ)哥(ご)の家(うち)にや(や)アそん(そんな)な者(もの)は居(お)ね(え) 政(まさ)そ(そ)りや(や)ア元(もと)締(ぢ)いけ(ね)え、  
 貴(あなた)方(た)の(ひと)を(い)れ(て)居(お)る所(ところ)でな(な)けり(や)ア小(わ)哥(ご)の(ほう)方(た)でさ(さ)うです(す)か(と)言(い)つて歸(か)りませ(す)が、  
 彼(か)の厩(うまや)は元(もと)締(ぢ)が(ひと)を(い)れ(て)居(お)るとい(い)ふの(は)、疾(と)うか(ら)聞(き)いて居(お)る話(はなし)だ、言(い)ひ譯(わけ)もし  
 ね(え)えで善(い)い子(こ)にな(ら)うとい(い)つてもそ(そ)りや(や)アい(い)け(ね)えお(お)前(まへ)さん(の)御(ご)返(へん)答(たふ)に依(よ)つては、  
 政(まさ)五(ご)郎(らう)又(また)申(まを)しあ(げ)なく(つ)ちや(や)アなら(ら)ね(え)こ(こと)が(あ)りませ(す) 興(き)何(な)んだ(と)……今(いま)の(たわ)言(ご)は  
 何(な)んだ、返(へん)答(たふ)に依(よ)つては政(まさ)五(ご)郎(らう)が(い)言(い)ふこ(こと)が(あ)る(と)か言(い)つた(な)、政(まさ)五(ご)郎(らう)が(な)何(な)んで(え)、  
 相(さ)摸(も)屋(や)が(どう)した(んで)え(と)半(て)前(め)が(ど)れ(ほど)の(にん)間(げん)だ(い)、ま(た)卵(たまご)の(か)殻(から)を(尻(しつ)に)附(つ)けて(や)が  
 っ(て)、生(なま)意(い)氣(き)な(たわ)言(ご)を(吐(つ)く)な(い)乃(お)公(こう)は(し)ら(な)ね(え)か(ら)知(し)ら(な)ね(え)とい(い)ふ(ん)だ(い)、よ(し)や

乃(お)公(こう)所(ところ)の乾(こ)兒(ごん)に金(きん)時(とき)の平(へい)六(ろく)とい(い)ふ奴(やつ)が(あ)つた(に)し(ろ)、乃(お)公(こう)も仙(せん)臺(たい)屋(や)興(き)五(ご)郎(らう)だ、柔(やはら)  
 かに話(はなし)を(し)たら遣(や)らね(え)こ(こと)もね(え)えが、汝(てめ)の(や)うに(い)やに忌(い)味(み)混(ま)り(の)白(こ)痴(ぢ)威(い)しに(驚(おどろ)  
 いて、出(だ)すや(や)うな仙(せん)臺(たい)屋(や)ち(や)アね(え)えや、汝(わ)れ(も)ま(た)面(つら)ア洗(あら)は(な)ね(え)な、出(で)直(な)せ 政(まさ)何(な)ん  
 だ(と)、御(ご)大(たい)層(そう)も(ね)え(こ)を(い)言(い)ふ(ね)え、仙(せん)臺(たい)屋(や)が(どう)した(い)、興(き)五(ご)郎(らう)が(どう)した(い)、  
 サ(ア)汝(わ)れ(も)の(ほう)方(た)で(さ)う言(い)や(ア)仕(しか)た(が)ね(え)、ぬ(た)事(こと)は(後(あと)と)で(吐(つ)け、汝(わ)れ(も)の(素(そ)ツ)首(くび)を(貫(く)う)か(ら  
 覺(かく)悟(ご)を(し)ろ』とい(い)ふ(と)、い(き)な(り)一(ひと)刀(とう)を(手(て)を)懸(か)ける 興(き)エ、この(や)郎(らう)巫(む)山(さん)戯(ぎ)た(眞(ま)  
 似(に)を(する)な、と(い)ひ(な)が(ら)、同(おな)じく傍(かたへ)の(所(ところ)に)置(お)いた(一(ひと)刀(とう)を)取(と)り直(な)して、振(ふ)被(か)つて(置(お)い  
 て斬(き)つて(蒐(か)る、こ(なた)の)政(まさ)五(ご)郎(らう)も透(す)か(す)飛(と)込(こ)んで(斬(き)り)附(つ)ける、雲(う)時(じ)の(間(ま)斬(き)結(むす)んで居(お)る  
 ところへ、裏(うら)と表(おもて)か(ら)ド(ド)ヤ(ヤ)と(飛(と)込(こ)んで(來(き)た)大(たい)勢(せい)、合(あ)點(てん)行(ゆ)か(す)と(振(ふ)返(かへ)つて  
 見(み)れば(斯(こ)は)如(い)か(に)、政(まさ)五(ご)郎(らう)の(跡(あと)か(ら)一(ひと)人(り)見(み)え(隠(かく)れ)に(附(つ)いて(來(き)た)乾(こ)兒(ごん)が、立(たち)返(かへ)つて(注  
 進(しん)した(と)見(み)ま(して)政(まさ)五(ご)郎(らう)の(家(うち)に)居(お)た(者(もの)が)四(よ)十(じゅう)人(にん)仙(せん)臺(たい)屋(や)へ(乗(の)り)込(こ)んで(來(き)た、早(はや)くも  
 此(こ)の(事(こと)を)聞(き)ま(した)、神(か)ん(た)多(た)町(ちやう)二(に)丁(てい)目(め)に(居(お)り)ませ(す)福(ふ)島(しま)屋(や)小(こ)七(しち)、龜(かめ)井(い)町(ちやう)の(松(まつ)川(がわ)屋(や)八(はち)兵(べい)

衛、同町の福島屋平六、木挽町二丁目の山形屋十助、佐柄木町の三河屋市太郎、これらが飛んで来て見ると、今仙臺屋の乾兒は不意を食って、上を下へと騒ぎ立てる、政五郎の乾兒一同は仙臺屋を取巻いて撃たうとするのを、政五郎は「汝達は手を出しちやアならねえ、仙臺屋と乃公と一匹取換だ、乃公の倒れるまでは手出しをす」と聴かねえぞ汝等は其所で見て居ろ」といふので、助太刀をしやうといふ大勢を制して、仙臺屋與五郎と斬り結んで居りますところへ、福島屋を始めとして、山形屋、松川屋、三河屋等が飛込んで来て ○「兎に角汝方二人、この喧嘩は乃公達に任して呉れ、任せることが出来ねえと言へば、乃公達の息の根を留めて置いて喧嘩をしろ、乃公達の眼の黒い中は死に合ひをさせるといふわけにやアいかねえ」と、頻りに四人の者が制しまするに依って、双方共に其の言葉で刀を引くことになりました、其の中によ組の土地のことでもありますから、東西の頭達が出張って参りまして、共に言葉を添へるといふやうなことになります、そこで仲人一統の扱ひのために大

事に至らずして、此の事は納まることになりました、で相摸屋に趣意として、金時の平六を始め、十一人厩屋で頭立った者が坊主に相成ることになりました、坊主になつて見ますると、人中へも出るわけにいかないから、仕方がないので、家に髪を伸びるまでは燻って居なければなりません、これを政五郎は如何にも氣の毒であるといふので、十一人の者へ單物、三尺等の手當をいたしまして、己れの家へ泊め置くことにいたしました、この評判が市中一般に知れ渡って、政五郎の義俠を感じるわけになりました ○「警を詰めさせたものであるから、それで趣意は立って居る、その者共が稼業も出来ず、家にあるから氣の毒だといふので、己れが引取って手當をするといふのは、弱者を助け、強者を挫く俠客といふのはこゝらであらう」といつて、諸方で相政の評判をすることになります、これがために其の頃幼い子供に至るまで、相政の名前を知らん者は土地にはないといふ位であります、然るに茲に松平筑前守といふ、此のお方は十二代將軍家のお側御用人をお勤めに相成りまして、



その勢ひは旭日の昇るやうな有様、其の若殿に新彌殿といふ方があります、此のお方は至って活潑にて、弓馬體槍劔に暗からんお方でありまして取分け馬術は岩波力次といふところの大坪本流の先生に學びまして、鞭許しの邊まで得ましたお人であります、或る一日お屋敷に於て内祝がございまして、岩波を始めといまして十四人の者をばお招きに相成ることになりました、豫て岩波は政五郎をば最負にいたして居りましたものでありますから、岩波と同道をして行かんかといふと、斯かる御方のお目通りをいたして置けば結構なものであるといふので、同道をいたし來て見るといふと、既に廣間に膳部が用意いたしてありまして、新彌殿始め其の席に就いて居るところでありますから、岩波どうも今日は甚だ遅刻をいたして相済みません、これへ同道をいたしたるのは、相摸屋政五郎と申しまする人入れをいたして居る者でございます、何分どうか御最負に御懸命の程を願ひます、新ア、左様か、其の方が有名な政五郎と申す者か、豫て余も名前は聞いて居る、追つて父上にも披

露をいたして、當家の出入を申附けるやうなことにいたそう、政有難き仕合せに存じます、新ア一盞取らせるであらうと盞を下さる、當人押戴いて物の見事に干しまして、御返杯をされると、新ア、なか／＼これは速かなもの、今一献重ねよといふので、二献が三献といふことになる、その中に性來若殿新彌殿は御酒の宜くない質であります、御酒の悪い方に限りまして、飲めば飲むほど青くなります、所謂上唇を嘗め、眼を据えて左右を見廻します、それを心得て居る御近習方はそろそろ其の場を立って仕舞ひます、新アこれ政五郎、何んぞやらんか、其の方などは町方に居る者であるから歌うことは出来るであらう何んぞやッて聞かせんか、政アどうも恐入ります、手前は至って不器用でございます、遊藝の方は心得ません、新アヤイヤ、能ある鷹は爪を隠すといふことがある、出来ぬことはあるまい、さう遠慮せんで、是非懇望だ、政ア、何んと仰せがありましたも、私が心得て居りますれば仰せに従ひますが、至って不粹な人間でございます、どうぞ、御勘辨を願ひま

す「新」イヤ〜、さうでない、是非やツて貰ひたい、全く其の方やれんとあれば酒を飲め、政「御酒も十分頂戴いたしました」新「イヤ、さうでない、何にもやらんければ酒を飲んで貰はなければならん、是非飲むやう」政「イエ、もう數献頂戴致しましてムいます」新「イヤ、數献頂戴したといふが、貴様に數献といふほどはまだ遣はさん、是非大きなので今一献……」政「イエ、もう頂戴はなり兼ねます無禮になりましたは却ツて恐れ入ります」新「イヤ〜今日は無禮講だ、無禮があつても苦しうない政「イエ、何んと仰せがありましたも、最早頂戴いたし兼ねます、どうぞ御勘辨を……」新「何んと言ツても飲まんか」政「へエ何んと仰せがありましたも、最早頂戴は出来ません、平に御免を蒙ります」新「余が斯くまで申すに其方は飲まんか、俄に怒氣満面に溢れまして荒々しいところの言葉」新「仰せにはございまするが、頂戴が相叶ひますれば頂戴をいたしまするが、頂戴がなり兼ねまするに依ツて御辭退を申し上げますので……」新「貴様は怪しからん奴だ、何んぞやれと言へば出来ぬと言ひ、酒

を飲めと言へば飲まんと言ふ、此の方の言ふことをば一つとして立てんといふ法があるか、言葉を返すといふは怪しからんやつだ、斯うして呉れる」といつて、づかづかとお席を離れて、政五郎の傍に寄るが否や、左の猿臂を伸して髻を掴み、右の足を顎へ掛け「新」エ、宜い面だ一バツとタンを吐ツかけて、其の儘元の席に着いた、並大抵の者ならば、飛掛ツてお止め申して、お談じ申上げるのであるが、固より尋常ならん政五郎、莞爾笑ツて其の場を立ちまして、人々如何あらうと見て居るといふと次の間に來て前に差して居りまするところの一刀の小柄を取りまして、手早く小指をブツツリ切りまして、杯を取寄せて其の中にこれを入れ、満々と酒を酌ぎまして、次の間から持參をいたして「政」最前から結構なるところの御酒を頂戴いたしました、尙ほも過ごせといふ仰せであります、用ひられませんことゆるお断りを申上げたるところ、唯今御不興を蒙むるやうなわけ、併し私は幫出同様諂ひますことは出来ません、私は身不肖ながら男でございます生血を入れましたるこれなる

所の杯をお受けを願ひたい、これをばお受けに相成りましたらば、手前も頂戴を  
 いたしますると、今まで笑みを含んで居た政五郎、血相を變へて杯を突出しました、  
 新彌殿も酔が醒めまして、茫然として政五郎の顔を見て居る。政「お答のあらせられ  
 ぬ以上は、お受け下し置かれぬものと心得ます、然らばこれにてお暇を申上ります」  
 と言つて、少しも悪怯れる様子もなくその儘その席を立て仕舞ひます、これを却  
 つて若殿新彌殿御感心をなすつて、御寵愛をなさるといふところの原に相成りまし  
 て、新「どうも政五郎といふ者は、町人ながらも適れな者である、流石は俠客といつ  
 て人に立てらるゝだけあつて、武士も及ばぬ位なる唯今の様子、感心をいたしました」と  
 いふので、取敢へず父上、筑前守殿へもお話に相成ります、これより政五郎をばお  
 呼出しに相成つて、二人扶持をお遣はしに相成らうといふのを、政五郎が承はつて  
 政「私はお屋敷へ参る御用はありません、先般失禮をいたしましたから、私は二た  
 び若殿へお目通りをいたす面目はございません、殊に二人扶持を頂くなど、いふ理

由はございません」と、使に参りました矢田部文四郎といふ者にキツパリ断ること  
 になりました、それを聞いて猶更御感心をなさいまして、新「愈々潔い者である、  
 然らば扶持を取らせんが、どうか余が屋敷に出入をいたして呉れるやうに」と再三  
 再四お使が参りますことゆゑ、それをも否むといふわけには相成りません、遂に  
 お出入をいたし、御扶持といつては下し置かれませんが、出るたびに莫大のお手當  
 を頂戴いたすことに相成ります、扱て茲に土佐の國土佐郡高知の城主にいたして、  
 二十四萬二千石松平土佐守豊信と申上げます、この御方は後に御隠居をなさいま  
 して、山内容堂公、維新の際には非常に御盡力を遊しました勤王無二のお方であり  
 ます、此のたび従前の抱への人夫といへるものをばお廢しに相成つて、新に人夫を  
 お抱へに相成ると申しますのは、どうもこれまでの人夫が宜しからんといふとこ  
 ろであります、北町奉行遠山左衛門尉といふ、これは有名の遠山金四郎といふ磊  
 落な人でありましたが、後に奉行に選まれまして、其の名前を四方に轟したお方で

あります、此の御方に對しまして御沙汰に相成りましたるに依つて、元締、下宿身元相應の請宿の名前を書いて出すやうにといふ仰せであります、そこで十名程の名前を書いて早速差出すことになりました、然るに弘化の三年五月に相成りまして、土州様が左衛門尉の差出しましたるところの書面を御覽に相成りまして、第三番目に書いてあるのが相摸屋の政五郎、思はずハタと膝をお打ちになつて、土今まで此者あることは知らんであつた、もう他は見るに及ばん、此の者を以て、余が屋敷の人入れをさせることといたさうと仰せがあつて、取敢ず留守居役廣瀬源之進、添役吉川吉郎といふ者に對しまして御沙汰に相成る、そこで兩名からして相摸屋政五郎に對しまして、明五日程の上刻（唯今の午前の八時）鍛冶橋内上屋敷に出でるやうにといふところの御沙汰であります、因みに申上げますが土州公の上屋敷といふのは、鍛冶橋を這入りまして、唯今の東京府廳の所であります、それから日比谷御門の傍に中屋敷といふものがありました、早速政五郎は翌朝罷出でることになり

まして、中の口へ控へて居る、程なうこれへといふので出て見ると、正面の所に廣瀬源之進、吉川吉郎の兩人居列んで居て、馮其の方が相摸屋政五郎と申す者か、始めて會ふ、拙者等は當家の留守居役廣瀬源之進、吉川吉郎と申す者、馮其の方を今日呼出したしたのは別儀でもない、殿より過日人入れの頭といふものを調べよといふ大命に付いて取調べたところが、其の方の名前をお上が仰せ出されに相成り、此の者へ當家の人入れをさせいといふところの尊命である、併し當家には年來仙臺屋與五郎といふ者が人夫を入れて居つたが、此の者を廢して其の方に申付けよといふ御沙汰である、左様心得ろ、政誠に有難きところの仰せでございますが、それは甚だ手前に於きましては迷惑を仕つります其の譯如何と御存ますれば、仙臺屋與五郎が御扶持に離れまして、私が御當家の御扶持を頂くといふやうなことになります、同業のことでもありますし又年來當人も御懇命を蒙つて居りまするのを、手前のために御最負を失ふといふやうなことになります、如何にも氣の毒千萬の

わけでございます、此の義は偏にどうか御勘辨を願ひたうございます源「イヤイヤ、それは上からいたして、是非仙臺屋を廢して、其方をとの仰せであるに依つて是非其の方に於て仙臺屋の跡を引受けて貰ひたい、政「左様ならば斯様に願ひたうございませ、私は何んと仰せがありましたも、仙臺屋與五郎を除いて、御當家へお抱になつるといふわけには参りません、與五郎はこれまで通りお抱へ置になりました、私を別にお抱へ下し置れるといふことでありますれば、兩人いたして力を盡すといふところが當然なことであらうと存じます、手前一人でございませすれば平にお断りを申上げます、源「然らば一應お上に其義を申上げる間、暫時控へろ」といふので、政五郎を控へさせて置いて、取敢へず兩人與へ参つて、豊信公へ此のお話を申上げますると、豊「如何にも感心をいたしましたものである、通常の者なりせば即座に受けをもちたすべきである、仙臺屋を除いて當家へ人夫を入れることは出来んといふのは同業の親情を失なはん適れなる者でやる、然らば斯様いたしましたらば彼も承知をいたすで

あらう、従前の人夫を入れるといふことは仙臺屋へ任して置いて、消防人足だけは今日より彼れに申附けることにいたしましたら、どういふものであらう」と、殿の仰せを、兩名も感心いたしましたものと見えて、『其の義然るべきでございます』と言つて取敢へず政五郎へ對しまして、源「上がこれくの仰せであるに依つてお請をいたすやうに」といふ、政「さう事をお分けになりましたのお話でありますれば、お請をいたすことにいたします、源「然らば其の方へ早速申入れる、消防の人足をば五十人明日夕景までに差出だすやうなことにいたせ、政「難有い仕合せでございます」とお請をいたして當人は立歸ることになりましたが、これから五十人の人夫を入れまするに付きましては、仙臺屋與五郎に對して、一應話しをしなければ濟まんと心得ますから、仙臺屋の方に使をやりまして、右の次第を述べさせ、『手前が再三御辭退を申上げたが、お聴入れがないに依つて、消防人足だけは手前の手から入れることにお請をいたした、これは甚だ輕少であります、お土産の印であります』といッ

て、先方へ五百兩贈りました、大概この株といふものは三百兩のものであります、ところへ先方へ五百兩の土産といふのは、己れが消防の株だけをば貰ひました次第でありますから、政五郎の料見では、この金で株を買ったやうなものであると思つて居ります、先方は金を持参いたしましたから、大きに赤面をいたしましたして、與イエ、もう、決して御心配は御無用に願ひたい、外の者なら知らぬこと、相摸屋の元締なら否やはございませんと、口では立派に言つて居るが、腹では如何にも面白くない、折りもあれば彼れを取押へて呉れやうと言つて、重ね／＼政五郎を怨じといふことになりました、然るに政五郎は今回土州公へお抱へになりましたに付いて、弘めをいたさうといふことになりまして、京橋南鍛冶町に、其の頃ひ梅松屋といふ處の割烹店がありました、此處で客をしやうといふので取敢ず知己の者へ沙汰をいたします、仙臺屋方へも使を遣ることになりますと、與五郎は不満の所でありますから、病氣といつて悴の儀三郎を名代に遣はすことになりました、當日の梅松

屋の賑ひといふものは一通りのものでない、固より交際の好いところの相政のことでありますから、諸方から出張つて参ります、思ひの外の人が集まりましたに依つて、政五郎は大いに喜び、一同に厚く禮を述べまして、正午頃ひから酒が始まりまして、夜の亥の刻過ぎになつて漸々退散といふやうなことになります、仙臺屋儀三郎は傍らに居りまして、何にかと世話を焼いて居ります中に跡片附も濟みましたるに依つて、九ツ頃ひ又飲直しをいたしまして、九ツ半頃、仙臺屋儀三郎、相摸屋政五郎乾兒三人を従へまして榎正町の己れの家に立歸らうといふのでやつて参ります、丁度中橋横町の側の所までやつて來るといふと、儀「エヘン／＼」といふ儀三郎の咳一咳、政五郎合點の行かんと思ふところへ、右と左からバラ／＼と飛出した人数、○「サア、相摸屋、汝の命は貰つた、政誰れた、相摸屋の政五郎、逃げも隠れもしねえ、遺恨があるなら名乗つて來い、歸りを待つて汝等は何にをす積りだ、サア何處のどいつだか名乗れ、○「オツ聞きたきや名乗つて聞かせる、乃公達は其處

に居る仙臺屋身内の者が、汝がために元締が土州様の大事な屋敷を半分取られることになつたが、本来ならば手前が何んといつても辭退をしなければなりやアならねえわけのものだ、サア、斯うなつた以上は汝の命は貰つたから、覺悟をしろ」と、前後左右から取圍む政「ヤイ、身にかゝる火の子は拂はなけりやアならねえ、言つて聞かせるから能く聞け、乃公の方ぢやア五百兩といふ金を出して、株を買つたやうなものだ、なせ男らしく乃公の處に来て、言ひてえことがあるなら言はねえんだ、ツヌ等のやうな蚊とんぼを相手にする乃公ぢやアねえが、斯うなつたからにやア仕方がねえ、一人々々は面倒だ、一同にかゝれと、腰を捻つて、新刀石堂は一、三尺四寸からある太刀びらものを引抜いて身構へた、一同彌やが上に尙ほも重んで勅込んで来る、政五郎が如何にして此の所を免れまするか、この納りは次回に申上ります、

第三席

さて政五郎は大勢の者に取巻かれて、寡は衆に敵せずの習ひで、捲り立てられて居

りましたところへ、俄に後ろからワツといふ人聲、「それ元締の大事だ、仙臺屋の奴等を打つて取れ」といふ聲、儀三郎初め一同は「さては相政の家から、一同支度をして出張つたものだらう、敵はん、遁げろ」と言つて、右と左へ散亂をいたしまする、數ヶ所に些細な疵を負ひましたけれども、豪氣の政五郎「政」どうした一同……○「元締、お怪我はありませんか 政」なに、左したる怪我はねえ、何んしろ大勢だから……其處らに仙臺屋の忤が居やアしねえか ○「イヤ、居ません 政」こうべの早エ野郎だ、不時に煙になつちまやがった、併し自分の方から喧嘩をしかけて、逃げつちまうといふのは意氣地のねえやつ」この儘にもならねえからといふので、一同がこれから仙臺屋へ押して行かうといふのを、政五郎が漸く止めまして、翌日になつて乾兒の中で頭立つた者を先方へ使に出すことになります、そこで先方の旨を聞いたところ、仙臺屋に於ては、誠に乾兒の者の心得違ひからして、飛んだ貸元に御迷惑を掛けた、どうぞ御勘辨を願ひたいといつて、謝罪状を出すことになります、そ

こで仙臺屋も此の事が土州公の御耳へでも止まるやうのことになれば、詰りお屋敷の通りも宜くない、もう此處らが人入れ業の見切どころと、芝西之久保葺手町に萬屋傳七といふ者がある、この者に株を譲りまして、自分は廢業をいたすことになりました、ところが仙臺屋の乾兒一同は仕方がないに依つて、相政の所に來て頼みましたから、相政が皆これを引取つて世話をいたします。其の年霜月中旬のことでありましたが、政五郎は卯之助といふ乾分を連れまして、吳服橋内の細川越中守様のお屋敷へ参りまして、部屋頭に會はうと思つて來て見ると、生憎部屋頭の彌之助といふ者が不在であります、仕方がないから戻らうといふ途端に、傍から七八人出て來て ○「イヤ、元締能くお入來なすつたもう其の中に部屋頭も歸つて來るでせう、まア兎に角折角お入來なすつたものだ、少うしお遊びなすつて……」政「イヤ、さうしちやア居られねえ、少しこれから他で用を達して來なけりやアならねえ ○「まア元締、折角お入來なすつたものですから、兎に角お昇んなすつて、まア下らねえ惡

戯をして居ますから、來て御覽なさいまし』と無理やりに奥へ伴つて参ります、傍へでは今を盛りと勝負の取遣り ○「サア貸元、一つ景氣の好いところを張つて戴きていもんで……」政「どうも乃公ア斯ういふことをやつたことがねえ ○「まアさう仰しやらねえで……」と無理に勧められますので、仕方がないから手を出すことになつた、豫て部屋の方は相模屋政五郎を好い雄鳥と心得て、始めたわけのものでありますし、政五郎は一向に博奕の方は茫暗といふ方でありますから、忽ち懷中に持つて居ました四五十兩を取られた上、腰の物から衣類まで脱いで仕舞うといふことになります、仕方がねえからどてらを借りて、爐の端に坐り込んで考へて居ると、悪い時は悪いもので、乾兒の卯之助も悉皆り取られて仕舞つて、搔卷を借りて同じやうに爐傍の所にブツ坐つて ○「どうも元締、酷え目に遭ひましたねえ 政「どうも飛んだ目に遭つた、この儘歸るのも忌々しいし、家に行つて呼び金をするとしたところが、此の装ちやア出られねえし、困つたもんだ』と言つて居る途端に、一方の



座敷から頻においで／＼をして居る者がある、ヒヨイと見ると、年の頃三十ばかりになり、女が、頻に斯う手招きをして居る。政「卯之、何んだか彼處で女が手を出して、此方を見ちやア招いて居るやうだ、彼處に行つて見ろ。卯「へエ……貴女は小哥共をお呼びなすつたか。女「ハイ、どうぞ兄さん此方に……今見て居りましたら、元締や貴方が酷い目に遭ひなすつて、もう部屋の者が共謀つて好い雄鳥と心得てやつたために、元締も飛んだ目にお遭ひなすつた、付てはお宅へおいでなさるといつたところが大變なもの、これは甚だ失禮であります、元締へ廻して上げて戴きたい。卯「何んです。女「なに、何んでもありません、此の財布にありますだけで取返しに附くものなら、一つやつて御覧なすつては如何です。卯「さうですか……どうも誠に済みません、さぞ元締もお喜びになるでせう、それちやア兎に角申上げませう……ねえ元締、今彼の姐さんが、これ／＼斯ういふことで……政「そりやア濟まねえなア、それちやア姐さん、折角の思召しだから拜借をします、小哥は相模屋政五郎

です、いづれお禮はします。女「なに貸元、お禮どころちやアありません、その昔貴方にお世話になつたことも……政「エ……女「イエ、なに此方のことで、何んだか意味のあるやうな話し、政五郎取敢へすその金を以てやるといふと、氣を抜いたのが宜かつたものか、こけ當りといふのか、忽ちの間に、以前取られたのを残らず取返して、衣類から腰の物まで手に這入ることになつた部屋の者は、爲に油揚げを攫れたやうなもの、呆氣に取られて居ると、政五郎は「政「どうも皆さん、飛んだお邪魔をしました、これは少ねえが一口飲んで下せえ」といつて、三兩ばかり投げ出して、表に出やうとした時に、乾兒の卯之助が「卯「元締、彼の姐さんはどうしませう。政「ん、お前御苦勞だが、この高砂屋に行つて居るから、彼の姐さんをつつお連れ申して呉れ。卯「ちやア跡から上がりませう。政五郎は先きに呉服町の高砂屋といふ家に行つて、逃へ物をして待つて居る、暫く経つといふと卯之助が最前の女を連れてやつて來た。政「サア姐さん、どうぞ此方へ……女「どうも元締只今は失禮をしました、折角のお

言葉ですからお邪魔に上がりました 政「邪魔どころぢやアねえ、どうか此方に、姐さん、お前さんが彼所で貸して下すつた爲めに、取返しも出来て、男も歸れるといふわけ、彼所で下手を捲つて仕舞ふといふと、耻を搔て立たなければならねえところ、お蔭様でまア疵が附かねえで有難うございました、だが姐さん、先刻お前さんが昔の恩返しだとか、昔お世話になつたといふことを言つたやうに私は聞いたがどういふ理由だい 女「ハイ、元締、貴方はお忘れになりましたか知りませんが、私も貴方が相模屋の元締といふことは知りませんでした、今日貴方が這入つてお入来なすつた時に、部屋の方が話をしたのに、あれは今宿屋町に居る相模屋政五郎といふ、相政といふ貸元だ、彼の人年十三の時、久保町の原で、金比羅様の歸途、女二人を助けたといふ話を聞きまして、扱てはと思ひましたが、併しお樂みのお邪魔をしてはと思ひますから知らん顔をして見て居りまする中に、貴方が酷くお悪い様子であります、遂には着てお居でなさいました着物から、お腰の物まで抵當

にお置きなさる始末、それゆえ私が萬分が一の御恩返しと存しまして、この乾分衆をお呼び申してお話をしたわけのもの…… 政「そうですか、それぢやア久保町の原で、癩のために苦しんで居た御母親の介抱をしてお居でなすつた姐さんは、お前さんでしたかい 女「ハイ 政「あれはお前さんの阿母さんかい 女「ハイ、私の阿母でございます 政「全くの阿母さんかい 女「ハイ、全くの阿母でございます 政「してお前さんは、京阪の者だといふお話だつたが、京阪は何所だい 女「ハイ、堺の者でございまして、私の阿父は竹本助太丈と申します、母はおたねと申しまして、私はおえいと申します、實は不幸が續きまして、あれから親父の病氣は癒りましたけれども、思ふやうに稼ぎが出来ません、それを苦に病んで到頭親父は黄泉の人となりまして、私と阿母と兩人りで途方に暮れて居りまするのを、日本橋の魚川岸の蒲鉾屋野田平の親方のために助けられました、葭町に構はれました、お耻かしい話ですが妾奉公、それから其の旦那に別れまして、其の後芝金杉の魚問屋中田屋文五郎さん

に又お世話になりました、ところが少しく理由あって別ねばならぬやうなことに  
なり、就いて此所の部屋頭は御案内の通り、文五郎さんの身内のことでありますか  
ら、跡片附のことに付いて御相談に参りました、ところが部屋頭はお留守ゆる、據  
ろなくお歸りまでお待ち申して居たところでございます 政「ア、さうかい、そりや  
アどうも飛んだことだ、して阿母さんとお前さんは今何所に居なさるえい」ハイ、貴  
方の側の松川町に居ります、知らぬことゝは申しながら、お宅へお禮にも出ません  
でございます、どうぞ御勘辨を願ひます 政「さうかい、程近い松川町に居るとい  
ふなら、ちと暇があつたら遊びにお出で、膝とも談合、及ばすながら御相談をしま  
せう」厚く禮を述べて、忌味氣は更になく、其の場を別れることになりました、然  
るにそれよりいたしまして、屢々此の女が政五郎方へ出入をいたします、文五郎に  
別れてからひどく困るやうなことになりましたものから、阿母が泣附いて政五郎に  
頼むやうなことになりました、それがためにこれを妾といたしまして、桶町に別宅

をさせることになりました、政五郎は折々これへ來ましては、憂を拂ふといふやう  
なことになつて居りました、處が其の頃、京橋の桶町に石屋の棟梁で三四郎といふ  
ものがあります、女房に別れまして、後妻をと思つて居る中に、不圖近い所におえ  
いが來まして、その姿を見るといふと、實に振り附くやうな美婦であります、乃公  
も男と生れたからには、どうかあの位な者を女房としてえものだと、戀慕の情を起  
しましたものと見えまして、政五郎とは懇意を幸ひ折々参りましては、人無きとき  
に袖襦を引きますが、大恩を受けましたる政五郎の顔へ泥を塗るやうなことをい  
たしては濟まんといふので、おえいは更に靡く様子はございません、所が嘉永の五  
年六月の中旬、若年寄鳥居丹波守、大名小路の役宅に移ることになりました、大  
名小路の上屋敷といふと、唯今の丁度東京府の眞向ふの所でございます、ところが  
同家の大部屋仲間、麻布谷町の萬屋佐兵衛元締の寄子にて、六人ばかりが揃つて鍛  
冶橋御門外の旭湯に出掛けて來た、夕暮方のことにて雑踏のためか穿いて來た藁草

履がなくなつちまつた。○「オイお前は番臺にブツ坐ッテ、何處を見て居るんだえ、穿物だの着物の氣を付けて呉れなくツちやア困る、乃公ア穿いて來た穿物がなくなツちまつた。主「さうですか、誠に相濟みません、何んしろまアこの通り込んで居りますもんですから、甚だ相濟みませんでした。○「込んでりやア猶更のこツた、さういふところを氣を付けて呉れなくツちやア困るぢやアねえか。主「少しどうぞお待ちなすツて、唯今代りを差上げることにいたします。暫く經ツて、十六文ばかりの冷飯草履を持つて來て。主「どうぞこれをお穿きなすツて……。○「何んだ、これは。主「イエ、お草履をお無くしなすツたと仰しやるから、代りにはなりません、兎に角これを召しなすツて……。○「馬鹿言へ、人を馬鹿にして居アやがら、こんな冷飯草履を穿いて行かれるものか、此方等ア折助だと思ツて、餘んまり人を馬鹿にしやアがる、乃公が今日買ツたなア一步二朱の駒下駄だ、卸したばかりのものを取られツちまつたんだ、十六文ばかりの冷飯草履を穿いて表に出られると思ツてるか馬鹿に

しやアがツて……。主「どうも誠に相濟みません、けれども貴方が穿いておいでなすツたのはお草履ですから、お草履を代りに上げます、駒下駄を穿いておいでなすツたなら駒下駄を差上げます、お草履だからお草履を上げるんです。○「なに此の野郎、巫山戯たことを言ふねえ、そうして汝は氣に食はねえ」と突然横ツ面をバツと撲ツた。主「なにをなさいます。○「なににも糞もあるもんけえ、それやツちまへ」といふと、番臺から引摺り下ろして、飛菟ツて湯屋の主人吉三郎を散々に擲り小桶を取ツて擲げるやら、柵を取ツて投げるやら、そこらにあるものを手當り次第に投げ付ける、散々擲ツて置いて表へ一同は出て行ツた、打倒された吉三郎遺骸ツて堪まらないと、うして此の返報をしてやらう、ン、さうだと、早速此の事をば伊澤美作寺様に對してお訴へをいたします、翌日直ぐにお手當になりました、右の六人の者はお召捕になツて入牢といふことになりました、この事を聞いた佐兵衛は驚いて麻布から飛んで参りまして、色々詫入りましたけれども、更に湯屋の方では承知をいたしません、

致し方がないから政五郎の所に行ッて頼むより外はないと、相政の所へ参りまして  
 佐「元締はお宅ですか政」これは何誰かと思ッたら、萬屋の佐兵衛さんですか、サア  
 どうぞ此方へお昇りなすッて…… 佐「お構ひなすつちやアいけません。實は少しお  
 願ひがあッて参りました 政「何んです 佐「大方お聞及びでもありません。旭湯の間  
 違ひのことに付きました…… 政「ヤア飛んだことでした。私もそれは聞きましたか、  
 嗚ぞ貴方もお困りでせう 佐「それに付きました、元締、どうか貴方にお取計ひを願  
 ひたい、高が十六文かそこの冷飯草履から事の起りましたもの、六人の者を牢へ  
 やるのも誠に心苦しいわけのものであります、何んとかお話を願ひたい 政「貴方  
 は行ッて話をなすッたか 佐「ハイ、どうも私が行ッても、何分先方で承知して呉れ  
 んやうなわけで…… 政「さういふことなら私が行ッて話を上げてませう」と取敢  
 へず政五郎が参りました、吉三郎に話をいたしますといふと 吉「外の人でない、相  
 撲屋の元締のことです。何んにも申しません、宜しくお任せ申します」

と體能く任して呉れることになりましたに依ッて早速願下げをいたすことになる、  
 此の一件に付いて手打をしやうといふので、同月二十七日、鍛冶橋御門外に其の頃  
 ひ曙といふ水茶屋がある、此處で仲直りをして今歸らうといふ途端に表から ○「御  
 免よ、相撲屋は居るか」と這入ッて来た、見るといふと、これなん三十六見附の番  
 所の人足の受負をして居る小谷藤次兵衛といふ人 政「オヤ、小谷の元締、何にか御  
 用ですかい 藤「相撲屋、お前に乃公ア今日は言はなけりやアならねえことがあッて  
 来た 政「何んです 藤「何んですちやアねえ、なせ口を利くんなら此處の持場の乃公  
 に渡りを附けて口を利かねえ、お前一人好い男にならうと思ッて、何んでもお前は  
 能く口を出す、斯ういふことが出来たら、乃公も土地に居るもんだから何んとか  
 話をして呉れさうなもんぢやアねえか、お前一人が好い男になるといふなア分らね  
 えぢやアねえか、土地に外に人間は居ねえと思ッて居るのかい 政「イエ、さういふ  
 わけぢやアありません、小哥が先に出て口を利くといふ話なら、あなた方始め、十

五ヶ町の皆さんにも口を利いて戴きますが、何にを言ふにも此處にお居でなさる佐兵衛さんから頼まれて、それに大した間違ひぢやアなし、高が仲間衆の間違ひのこと、それゆえ小哥が口を利いたんです。藤高が仲間衆とは何んでえ、縦令へば仲間が乞食だらうが、出て口を利くからにやア、行届くやうなことをして口を利け、なせ乃公の所に渡りを附けねえ、總體汝は氣に食はねえ野郎だ。政何だと……藤何だも糞もあるもんけえ、大きな面アしやがつて、男と言やア汝より外にねえといふ風をして往來を歩きやアがる、折があつたら、汝に言草を言はうと思つて居た、あんまりちよこまかするな。政何んだと、ちよこまかするなとは何んだ、乃公が頼まれて乃公が一人で事をするのが悪いか、悪いならどうでもして見ろ。藤何んだと、この野郎……といふが否、拳固をかためて擲つて来る、政五郎はヒラリと身を換はして置いて、飛掛つて小谷の頭を一つ打った。この人は手などを滅多に掲げたこととはないので、一寸の虫にも五分の魂ひ、所謂政五郎少しく癪に障つたものと

見えまして、いつにもない荒いことをすることになりました、ソレ間違ひだといふ中に、右と左から来て。〇「まア〜兎に角元締、爰んところは小哥達に任して下さい」といつて、其處に居合した者が留めたので、藤覺えて居ろ」といふ捨言葉と諸共に表に飛出した小谷、我家を指して歸る、跡で政五郎が、政お前さんが留て下さるなら、なせ小谷屋を留て置いて扱かつて下さらん、野郎を歸して仕舞へばもう仕方がない、斯うなつたからにやア覺悟をしなければやアならねえ」と一同が留めるのを肯かすして、政五郎は我家を差して歸ることになります、いつもにない蟲の居所が悪かつた爲めに、斯様な間違ひをしましたものでありますから、取敢へず乾兒を始め支度をして、今に先方から出張つて来るであらうから、來たらやつちまへといふことになりました、これから通り三丁目乃至は横町界隈の所まで張込みを附けまして、先方から來たるのを待受けるといふことになります、然るに此方でも小谷屋は俄に廻状を出して大勢の者を集めることになりました、大凡二百人ばかり集

ッて押出さうとするといふと相模屋の方では五百人ばかりの人が集つたといふ話、流石にこれに驚いて、小谷屋は出兼ねて止まることになり、さうして先方から押し来るだらうから、来たらずちまへといふので、双方睨み合つて居るやうなわけ、これを聞いて政五郎の妻のおえいは、一方ならん心配をしまして、どうしたら宜からうといつて考へて居るところへ、折しも宜れと三四郎、三姉さんお在宅ですか、いまい「オヤ、棟梁能くお入来なすつた、何にか御用……」三「どうも飛んだことでした、今話を聞いたところが、小谷屋の方でも支度をして、これから出懸けやうといふ、又相模屋さんの方でも、大勢来たからやツちまはうといふんで、睨み合つて居る位のもの、附いて小谷屋が今他で話を聞いたんだが、お奉行様が相模屋は何んにでも口を出して、兎角に間違ひは彼の者から起る、彼者を娑婆に置いては間違ひが絶えねえから上げて仕舞はうといふんで、今お手當にならうといふ、さうなりやア相模屋さんばかりぢやアねえ、小谷屋始め残らず上げられるといふことになり、八丈

とか三宅とかに遠島になるといふ語でするい「エ、ツさうですか、それア飛んだこと……棟梁どうか仕様はありますか」三「そこでさアね、仕様のねえこともねえんだがね、おえいさん疾うから小谷屋がお前さんにお話をしても、風に柳といふやうな鹽梅、今日といふ今日はお前さんにお話をしやうと思つて来たんですが今の一件も工夫の附かねえこともねえんですが、魚心あれば水心、お前さんの方で小谷屋に趣意せえ立て下さりやア、小谷屋だつて及ぶだけの心配はしませうぢやアないかえい」それでは妾が貴方のお言葉に従ふといふことになりましたら、どう心配をなすつて下さいませ、三「そりやア、小谷屋の云ふことをお前さんが背いて下さるといふことなら、小谷屋の叔父といふものが、南町奉行伊澤美作守様の御寵愛を受けて、彼のお屋敷へは始終出這入つて居るもんですから、それから拜んで貰ふといふことになつたら、助からねえこともなからうと斯う思ひます、必ずまア取爲し方で助かるだらうと思ひます、それを骨を折つて上げるからにやア、お前さんにも承知をして貰はなくッ

ちやアならねえ、どうです、諾と言ッて下さるかえい『ハイ』『ハイ』『ハイ』ちやアねえ、お前さんが嫌だと言ふならそれまでの話だ、ねえ、お前さんが大恩のある相模屋の元締だ真逆遠島になると聞いたら、お前さんも好ましいわけのもんちやアあるまいと思ふ、どうだい、諾と言ッて承知をして下さるかえい『ハイ……』『イヤ、承知をしねえといふなら仕方がねえ、小哥は御免蒙るえい』『まア少しお待ち下さいまし』と、三四郎を止めて置いて、暫くおえいは考へて居りましたが……明治の今日の婦人ならそんなことはありませんが、そこは舊幕の人間は仕方がない、殊に女の狭き料見から、大恩のある政五郎の助かるものならといふ念を起したのは愚の至り、忽ちそれではといふことで、下紐を解くといふことになりました、仕合せ好しと三四郎は喜んで行かうとした時にえい『必ずお頼み申します』『三』それは受合ッたからにやア大丈夫だ』と天にも登ッた心地をいたして立歸ることになりました、然るに翌日になッて、お奉行から八方の顔役又は蔭の者へ對しまして、御内意のあつたものと見え

まして、双方共に引分けよといふ仰せに基いて、和解をするやうなことになりました、それを何處かから聞き込むで来た三四郎は、又翌晩もやッて来て『三』さておえいさん、漸々のことで小哥が叔父に頼んだ爲めに、お奉行様が御説諭になッて、双方共に和解をするといふことになつたこれは皆んなお奉行様から御内意のあつたものだえい』それはどうも有難うございます』と、恩に感じて又も道ならん契りを結ぶやうなことになります、さて此方の政五郎に於ては、右様なことは一向知らない、己に手打といふ事になり、中橋の往來に於て、せ組の頭取方が口を利くといふことになりました、そこで相模屋一家は中橋の有名な寒菊の家を集まる、又小谷屋の方の一家は小河屋に集まることに相成つて、これから出て參つて手打をいたすといふことになりました、然るに其の後に至ッて政五郎は、三四郎とおえいの事を早くも悟りましたに依ッて、二人を取ッて押へ異見を加へて、腹の變ッた女はこれまでいあるといふので、綺麗に己れとの縁を切りまして三四郎と添はしてやらうといふや



うなことになりました、これらは實に勘忍の強いといッて然るべきもの、通常の者ならば奸夫姦婦を打ッて捨ッべきであります、更に右様のことはいたしませず、生涯の契りを己れと結んだわけではなく、唯だ一時親子が困るといふところで世話をいたしましたものでありますから、爰で立派に夫婦にいたしてやつたといふのは、實に賞すべきところの義侠の者であります。さて其の後にいたりまして、この相模屋政五郎といふ者は、猶更士州家の御寵愛を蒙むるやうな事になりました、追々四方に其名を輝やかします、然るに此のたび豊信公は御隠居をなさいましたのが、御年三十七歳、若殿豊範と仰しやいますお方は、御年二十歳で御家督に相成ります豊信公は御隠居となッて容堂と名を改められました、今戸の別邸へお引移りに相成ります。これへ参りました政五郎は猶更御奉公をいたして居ります、その中に豊範公よりいたして政五郎へ五人扶持を下し置かれますことになり、御隠居よりは莫大のお手當を頂戴するといふので、政五郎はお家のためには、一命を棄てるのは一毛

を抜くより軽いと心得、折りもあらば御奉公をいたさんと、怠りなく出入りをいたして居ります。然るに明治の五年六月の中旬に至りまして、山内容堂公は御逝去に相成りました、御尊骸は鯨洲の下總山に對して葬むることに相成ります、其の當日通夜のことでありましたが、次の間に於きまして、兩肌を押脱いでアツヤ突立てんとする者あり、物陰より窺ひましたるのは、これを自由黨の總理、板垣退助君、飛込み來ッて其の手を押へて、退これ政五郎、貴様は亂心ばしいたしたか、何んで斯様なことをいたす、政「ハイ、私は大恩を頂戴いたしましたところの殿様、殊に山内といふのは御遠慮遊ばして、山中といふ姓までをも、去る明治元年に頂戴をいたしました、これまで一方ならんところの御高恩、忘れる暇はございません、然るに此のたび御逝去を遊ばしまして、御尊骸は鯨洲に對してお葬ひ申といふ、何卒いたして私も御供をして黄泉に参ッて御奉公をいたする心得でございます、お一人で殿様の地下へ成らせられるのを、此の儘に見て居るわけに相成りません、何卒そこをお離

し下し置かれますやう…… 退イヤ、貴様の志しは感心いたすが、併しそれは、一を知つて二を知らんといふもの、常主豊範公にも御高恩を蒙つたことは忘却いたすまい、然らば此の上からは、先君へ對して勤めるところを、當主へ對して飽くまで御奉公をいたしなば、千僧萬僧の供養よりも遙に優つたわけのもの、然るに何んぞや、此の場に臨んで腹を切らうなどいふは、心得違の甚だしきものだ、止まれ、必ず共に腹を切るべきわけのものでない、それとも強つて切腹いたすと言ふなら止めはいたさんが、どうだ 政どうも恐入りました唯今の御異見、大きに心得違ひを對して、飽くまで御奉公を仕つります 板イヤ、それでこそ眞個の者だ、必ず共に左様相心得ろ、腹を切つて黄泉のお供をするのが忠義であれば、貴様一人ではない、我々と雖も皆爲すところであるが、これらは益なきところであるゆる貴様を止める次第である、宜いか、心得違ひをするなよ』と懇々と御説諭、これに依つて政五郎

は死を止まりました、益々當主豊範公へ御奉公を勵みます、其の後板垣公が、相原尙文といふ者のために負傷をなされました際は、政五郎は彼の地へ出張りまして、非常に板垣公のお世話をいたしまして、祝宴の席にも列なることになりました、さて此の政五郎といふものは、斯かるところの義侠の男でありますに依りまして、江戸と稱する昔時より、東京と改稱しましたる後に至りますまで、市街に間違ひがあると思はば、少しも躊躇をいたすといふことなく、第一番に駆着けまして、仲裁の勞を執るのに盡力をいたしまして、貧民には先んじて施與をいたし、獄舎で苦しむ者などには手當等をいたしてやつたことが度々ありました、この相政の傳記に付きましたは、此の他に尙ほ京阪地方に置きまして義侠を現はしますることなど、種々講演いたすべき事がございますが、餘り長く演じましては看客諸君の御退屈ともならうと考へまして、残念ながらこれにて止め置きます。

小喧嘩五郎吉

一龍齋貞山口演

俠客傳

人は一代名は末代、誰も世の中へ名を残したく思ひますが併し一代に安全の事のみはございませぬ。随分思ひ切つた豪い事をやりまして、後生其れが物語りと成つて残りますのです。彼の浅野匠頭様の家來堀部安兵衛は、生涯に三度敵討をいたしました。則ち幼年の際に叔母の仇、中年に伯父の仇、後年四十七士の一人として主君の仇を報じ、美名を萬世に傳ふ。又武藝を以て天下に其名を残しました荒木又右衛門は、生涯に三度仇討の助太刀をいたしましたといふ、第一は乃ち有名な伊賀の上野に於ては、義弟渡邊數馬の爲めに之れを助け、第二にはまた唯今茲に辯じまする目黒行人坂で、孝子の爲に助太刀を致し、其れからもう一度は大和河原に於て、門人水見が爲に仇討の助太刀を致しました、扱是は又右衛門が未だ大阪に道場を開い

小喧嘩五郎吉

て居た頃取立てました門人の中に、俠客といふ、江戸で申します町奴であります。其の入門者が大勢あつた其内に、加藤式部少輔の浪人森五郎右衛門といふが弟子となり、屋號を喧嘩屋、大體腕の出来る處へ、尙先生に就て學びましたので、中々素張しい程の上達、その中に又右衛門が江戸へ下るに付いて、一同の門人に別れ、跡道場を頼みました時に、彼の五郎右衛門に、お前は劍難の相がある、平生の短氣が宜しからんゆゑ、成丈け氣を付けるやうにと、特に五郎右衛門に懇々言ひ諭して、又右衛門は江戸へと下りました、五郎右衛門も、師匠の此の言に感じ入つて、能く其の身を慎み、折節道場を見廻つて居りますが、何にせよ子分丈でも三四十人あり却々仲間中でも宜い顔であります。然るに脇坂淡路守の浪人で、赤川半平といふ一刀流の劍士がありました、是れは又酒を呑み、殊には其の身持の甚だ宜しくないので、主家を浪人してから後といふものは、此の俠客仲間の所を錢を貰つて歩きましたが、若し之れを與えん事でもあると、忽ち暴言を放ち、果は表へ出て對手にな

れといふ、手も付けられぬ白徒、流石に俠客仲間でも是れを蛇蝎のやうに嫌つて居ります、だが關係になると面倒故何所の賭場でも來れば幾何かを與えるといふ、悪い癖を付けましたが、喧嘩屋だけは出しません。で毎日のやうに廻つて歩く半「許せよ」○「オヤ、是れは赤川先生でございますか」半「大層盛んだね、一ぱい吞まして貰はうかエ」○「へエ、ホンの少々でございますが……」半「左様か、貰つて置かふ」又先へ行き○「大層盛んだな」△「へエ先生でございますか」半「一ぱい吞まして呉れ」△「未だ上りが少なふございますから、モウ少々廻つてから、入しつて下さいまし」半「何だ、出せん、出せんければ表へ出ろ、對手になつて遣はす」△「へエ、ぢやア之だけお持ちなすつて下さいまし……」半「恁んな工合で喧嘩屋の所へもやつて來て」半「許せよ」五「オヤ赤川先生お出でなさいまし、何ぞ御用ですか、半「大層盛んだな、一ぱい吞まして貰はう」五「へ、——、御冗談を仰しやいます取るに足らぬ私共、却々お武家様方へお酒の代を上げるなど、いふ事は出來ません

お断はり申します。併し其れが腹が立つから表へ出ろ、勝負をしろと仰しやるなら是非が御座いませぬ、お對手になりませう」半「いや其れには及ばん。然らば歸る」喧嘩屋は赤川を見れば反對に脅かしますから、喧嘩屋の所だけは貰ひに行かない、其れが打てば響くで他の賭場へ聞えました。半「許せよ」甲「オヤ赤川先生」半「大層盛んだな、一ぱい吞まして呉れ」甲「先生、ホンの少しでございます半「ア、宜し甲「さて先生」半「何だ」甲「他ではございませぬが、貴所は私共の所へばかりお出でなさんで、三度に一度は喧嘩屋へも行つて頂きたいものでございます。貴所は些とも喧嘩屋へはお出でなさん、尤とも喧嘩屋では脅かされるといふことでございませぬが……」半「馬鹿を言へ、何で左様な事があるものか」とは言ひながら赤川、心に咎めるから五郎右衛門さへなければと、始終胸にある。或時天満の髪結床へ」半「許せよ」半「亭へエ旦那、此のお客様お一人で、次が貴所でございますから、一寸一ぶく召上つて居て頂きたふ存じます」傍らはらへ腰を掛けて取出す貰入、半平一ぶく喫

ながら、ヒョイと先方を見ると、前の方が全で禿になり、後の方に毛が僅かある。能くいふ豆腐屋の金柄杓へ燈心蜻蛉が留つたやうな小さな鬘に結て居ります。之が平生憎しと思ふ喧嘩屋五郎右衛門だ。半平宜いものが居たと、半コレ亭主 亭へエ半「其髪を結ふのか亭左様でございます 半其れッばかりの毛で満足に鬘に結ふといふのは間違つて居る。クリ〜坊主に剃つて了つたら一番早からう：：」床屋の親方は大變が出来た、自分が頭をやつて居るのが喧嘩屋、賣込んで来たのであるから必らず仕入るだらうと案じて居る。五郎右衛門はフ、ンと鼻で笑ひまして、何にもいはず。亭へエお待遠さまでございます。旦那貴所さまで」立上つた半平。五郎右衛門は摺違つて此方へドツカリ腰を下ろす。腰から取出した大きな葎入、二三ぶく喫て居たが、半平の髪を梳き始めたのを見ると、五「オイ親方亭へイ五其の頭を結ふのか亭へエ五幾らお前が髪を結ひ方が上手でも、大體頭の形が悪いから旨く結えなからう 半何だ、無禮者の 五ナニ、ヤイ半平、何方が無禮だ、乃

公はクリ〜坊主にされるほど悪い事はしねへ、無禮を咎めたら汝の方が無禮だらう 半言ふな己が：：早や真赤に成つて立上つて半平、傍はらにあつた、床几を取ると喧嘩屋を目掛けて打込みます。ヒラリ體の轉した五郎右衛門、其手を取つて逆に、エイツと前へ引く、倒れるやつを穿いて居た、堂島下駄といふのを脱きましてポカリと一つ。眉間は破れて流れる血汐、半平固より五郎右衛門に及ばざる事遠し、半「覚えて居れ」といふ言葉もいと顛へて見憎くも、這々の體で逃出しましたニツコリ笑つて悠々と立戻る五郎右衛門。十日ほど経ちまして、渡邊橋の有頂天九郎兵衛といふ、之も俠客の一人から仲間仲間があつたと呼に來られた戻り道、モウ夜の四ツ、駕籠を急がして來る橋の袂、エイツと突出す槍。駕籠の中でウーン、バタ〜。曲者は其儘逃げる。駕籠昇は驚ろいて直ぐに宅へ知らせる。子分の方が駈付けて來て、手當を致さうにも急處の深手で御座います、早速家へ連れて戻つて來たが、其時には早や虫の息と相成つて居ます。其頃合直き近所の鹿島屋

といふへ奉公に參つて居ました當年十四になる伴の五郎吉が、かくと知らせに驚ろいて駈付けました。五郎阿父さんシツカリなさいまし 五「ウム、五郎吉か、乃公の敵は赤川半平、ア、口惜い」只た一言遺して、あはれや遂に亡き人となりました。一家の歎きは申す迄もなく、子分も日頃やさしい、心意氣の立派な親分に訣れて、孰れも親に別るゝが如く、世間でも日頃評判のよかつた親分の事でありますから、之れを惜み悲まざるものなく、されば葬式も立派に營み、七日七日の法養がすむでやがて四十九日も経ちますと、或日の事五郎吉は、母の前へ兩手を突いて 五「阿母さん、私はお暇を頂きたう存じます 母「お前、何で暇を呉れといひなさる 五」どうぞ阿父さんの敵、赤川半平を討ちたうございます 母「年の往かないお前が一人で討てますか 五」江戸へ行つて荒木又右衛門先生を尋ねて劍術を教えて貰ひます、どうぞお暇を下下さい 母「ア、感心な心掛けた、暇をやりませう。立派に打て來なさい」他の者が 〇「姐さん、十三や十四の者を一人で江戸へ追放して、どうする心算でこ

ざいます 母「イヤ、皆な構はずにお呉れ、本人の望みだから。…サア行つて來るが宜い」二十兩の金と、身支度をして呉れました。只今なら汽車汽船の便利があるから何でもありませんが、其頃どうして十四の小僧が江戸迄一人旅、容易ならん苦心で、馬喰町四丁目の三河屋方へ泊りました 五「姐さん 女「ハイ 五」江戸で一番御利益のある、神様でも、佛様でも、私に何うか教えて下さい 女「ハイ、皆な御利益がございます 五」其中でも一番確な御利益のあるのは何所でございませう 女「左様でございます。マア私の考へでは、淺草の觀音様はお堂も大きいし、ア、して古く大きくやつて居りますから、悪い者は賣らなからうと思ひます…」三越呉服店とでも間違ひましたか、其言葉で淺草觀音様へ參詣御圖を頂きますと、尋ねる者は高い所とある。山の手を探したら先生の所在が分るだらうと、宿屋で辨當を拵らへて貰ひまして、四ッ谷赤坂麴町から牛込へ掛つて來る。神樂坂に柳生眞流荒木又右衛門といふ表札が見へた。小僧は飛立つほど嬉しく 五「お頼ふ申します 武」ドール

内弟子の北堂武右衛門 武「何れから見えた 五「荒木先生は在つしやいますか、お在になるならば大阪から、五郎吉といふものが尋ねて来た」と仰しやつて頂きたうございませす 武「ウム、控えて居なさい。先生申上げます 又「オ、武「大阪から五郎吉といふ者が尋ねて参りましたが、如何いたしませう。大阪の五郎吉、ハテナイヤ一寸行つて見やう」又右衛門玄關先へ出て見ると両手を突て居る可愛らしい小僧、一寸思出せないの、又「誰だ」又右衛門の顔を見ると其處は子供、ワツと泣き出しました。五「先生、喧嘩屋の件でございます 又「ウム、さうか能く来た、親父と江戸見物に参り、親父に迷れたか。何を泣く 五「先生、お父さんは殺されてございませす 又「ナニ、誰に殺された 五「脇坂浪人、赤川半平に殺されました 又「ウム、大阪を立退く折彼れ迄心着け置いたが、さてはさうか。シテ何で其方は江戸へ来た 五「劍術を教えて頂き敵討をし度ございませす 又「宜し教えてやらう。上れ」其れから道場へ通し、二三日遊ばして置いたが、巻藁を拵らへ、道場の真中

へブラ下げ 又「五郎吉 五「へエ 又「其方持つて居る脇差で、此の巻藁をブツリと向ふから貫ぬいて見ろ」行つて見ましたが、ブラ下つて居るから突けません。毎日頻りにやつて居る中に何時か突き貫けるやうになり 五「先生出来ました 又「ウム旨い其處をグルリと廻せ」又其れをやる。五「先生廻りますやうになりました 又「ウム、スポンと抜いて、半から切つて見ろ」又其れが出来るやうになり。ブツリ、グルリスポン、三ツとも出来て来ました。又「サア其方毎日江戸を探して歩け」五郎吉は一生懸命、辨當を持つて探し歩いて、今しも差し懸つたのが目黒行人坂下、小さな道場でポン／＼、打合ふ竹刀の音が聞えます。隣りが白屋でありますから、其の白の上へ乗り、武者窓から見ますと、七八人の弟子に稽古を付けて居るのが、見覚えの赤川半平、而も眉間に残る月形の疵は、父五郎右衛門が堂島下駄で付けましたのに相違ございませせん。白を飛下りますると牛込まで飛んで戻り、五「先生、敵の赤川半平の居る所が分りました 又「ウム、何處に居つた 五「目黒行人坂下に小さな

道場があつて、其處に居ります、どうかお助太刀を願ひます 又『五郎吉、親の敵を討たうといふ者が、人を頼みにするやうな事で何とする。之から一人で行つて、敵えたブツリ、グルリ、スポンをやれ 五』けれども先生、巻薬とは違ひまして、相手は生きて居て動きます 又『若し叶はずば其方討たれて了へ。又右衛門が骨は拾つてやる。オド致くすな、行けッ 五』ハイ、其れでは何分宜しくお願ひ申します 脇差を取るが早いか急いで駈來る目黒行人坂。見れば稽古は済み、門人は歸りました 跡、上り口の方の障子の透間から窺がふと極狭い家を無理に造らへたもので、道場は玄關の障子を開けて僅かに四疊半、赤川半平は妻がない、雇ひ女か何かの、膝を枕に玄關の方を背中にして白髪を抜かして居るのをジツと見澄した五郎吉、持つたる脇差を引抜くが否、サラリ障子を開くなり向ふに寝て居る赤川を、エイッ。ブツリ、グルリ、スポンとやりました。ア、ア、赤川半平腕は出来るが孝子の一心、覚えし手練の切先や見事に、再度切つたのが横腹、女は驚ろいて逃げてしまつた……

此方は又右衛門五郎吉を先へ出して置た後で。又『危険く。彼アして觸まして出してやつたものの何をいふにも未だ小腕、可惜孝子を死しては……遅れては一大事、ドレ行つて見て遣らう』深編笠を頂だいて、急いで後から駈け付けて來ると五郎吉 五『先生、敵が討てました 又』ウム、モツやつたか 五『ブツリ、グルリ、スポンが旨く行きました 又』ウム、其れは不思議く 五『劍術使など、言ても弱いものでございます。此のブツリグルリなら誰でもやれます 又』馬鹿をいへ、さう旨く行くものではない。併し見事に討取つたのは重疊……』早速お届け、大阪で五郎右衛門を討つて赤川が立退いた届けは出て居るから。上よりお褒めのお言葉が下る。スルと牛込の荒木の道場の近傍を瓦版に起して『エ、御覽じませ、世にも珍らしい敵討の次第が詳しく分つて一枚八文……』又右衛門が 又『何を賣つて來たか一寸呼んで買て見ろ』武右衛門が 武『先生、之でございませ』取上げて見ると子供が脇差を抜き、怖い顔に書てある武藝者が一刀を振被つて居る、其の下腹の所へ脇差を突込んで居



る。其後ろに深編笠の武士が指を二本握つて、忍術でも使つて居るやうな鹽梅。まだ可笑いのは、其隅の所に煙のやうな物の中に天狗が羽團扇を持つて睨んで居る。又右衛門。又「何だ此の繪は……此の子供は五郎吉、腹を突刺れて居るのは半平、ぢやア此の深編笠を被つて居るのは乃公だ。天狗は何だらう、妙な繪を書くものだ」之が評判となつて荒木又右衛門の道場へ入門する者が續々殖ましたといふ。扱此の五郎吉は、後に大阪へ歸つて俠客の中に小喧嘩五郎吉といふ名前を揚げ親にも優る俠名を遺しました。小喧嘩五郎吉復讐の一節、是れにて結末と致します。

文講 俠 客 傳 終

明治四十三年九月二十五日印刷  
 明治四十三年九月二十八日發行

定價金五拾五錢

編者

編者

博文館編輯局

著作權所有

發行者

大橋新太郎

與付

印刷者

水谷景長

印刷所

博文館印刷所

發行所

（東京市日本橋區本町三丁目）

博文館

發售所 東京市日本橋區本町三丁目八番地  
電話東京二四四一  
電話東京二四四一  
電話東京二四四一

古今第一流の講談師講演 博文館編輯局編 ● 每巻讀切

# 講談文庫

各册洋裝 上製  
木六判總布 一葉挿入  
紙版一册四百五十頁

本文庫は古今名代の講談師が得意の人物の選抜して毎巻讀切  
講演したるを蒐めたるし讀んで面白き無類り家庭夜話の資料及び座右の  
好伴侶として世に薦む

● 講談 忠臣藏 (三版) 全一册 正價金五拾五錢 郵税金八錢

目次 ○發端 ○松の間の刃傷 ○田村邸の切腹 ○三番早打 ○赤穂城大評定 ○山科の浪宅 ○南部阪雪の別れ ○  
次 ○義十勢揃ひ ○吉良邸打入 ○泉岳寺引上 ○十八箇條申開 ○義士切腹

● 講談 義士銘々傳 前編 全二册 正價各五拾五錢 郵稅各八錢

前編 ○大石内藏之助 ○堀部彌兵衛 ○堀部安兵衛 ○赤垣源藏 ○不破數右衛門 ○間重次郎 ○勝田新左衛門 ○  
目次 ○武林唯七 ○大高源吾 ○菅谷半之丞 ○前原伊助 ○岡崎八十右衛門 ○横川勘平 ○千葉三郎兵衛 ○間  
瀬孫九郎 ○倉橋傳助

後編 ○大石主税 ○潮田又之丞 ○三村次郎右衛門 ○速水藤左衛門 ○杉野十兵次 ○岡野金右衛門 ○矢田五  
目次 ○大石左衛門 ○矢野右門七 ○中村勘助 ○神崎與五郎 ○與五郎東下り ○寺坂吉右衛門 ○原惣右衛門 ○吉  
田忠左衛門

● 講談 武勇傳 前編 全二册 正價各五拾五錢 郵稅各八錢

前編 ○武藏坊辨慶 ○鬼兒島彌太郎 ○濱松響の太鼓 ○盲人米市 ○伊達正宗阿武隈川の勇戦 ○明知三羽鳥  
目次 ○鬼上官 ○飛大名 ○天王山乗切 ○坂上田村麿 ○關ヶ原の勇士 ○後藤又兵衛 ○出世の大盃 ○越前の  
赤鬼 ○明智左馬之助 ○柳川庄八 ○隅田川乗切

後編 ○朝比奈三郎 ○吉野落 ○天正三勇士 ○味方ヶ原の偵察 ○佐屋川の一番乗 ○醍醐の花見 ○朝鮮虎狩  
目次 ○關ヶ原前記 ○小山評定 ○眞田の入城 ○安田作兵衛 ○大久保彦左衛門 ○山田長政の遠征 ○清正公  
の祖父 ○帝國海陸軍の譽 ○摩天嶺の勇士 ○旗幟三笠の奮闘 ○榎原兵曹の奮戦 ○栗本  
兵曹

● 講談 大岡裁判 全一册 正價金五拾五錢 郵税金八錢

目次 ○小間物屋四郎兵衛 ○戀娘昔八丈 ○藥種屋政談 ○迷子札精神極印 ○夢の浮橋 ○雲霧高嶺白浪 ○嘔吐  
彌次郎 ○村井長庵

● 講談 俠客傳 全一册 正價金五拾五錢 郵税金八錢

目次 ○幡隨院長兵衛 ○花川戸助六 ○金看板甚九郎 ○奴お初 ○飯岡助五郎 ○新門辰五郎 ○清水の赤郎長  
○江戸の相政 ○小喧嘩五郎吉

近刊豫告

烈婦傳 大閤傳

博文館發行

沼南 島田三郎君序  
青洲 箕浦勝人君跋  
颯川 志賀重昂君跋

田中萬逸君編

●發行所 博文館●

# 死生の境

編前

全一冊 四六判 上製美木  
卷中挿入寫眞版數十個  
正金七拾五錢  
小包料金八錢

革命は劍り火あり血あり維新の鴻業は亦此三首に由活躍し明治功臣諸公が

時死生の巻を馴熟し而も克く身命を完ふして報公の誠を盡せる 生ける歴史は隠れた無量の

好史料を包藏する明治歴史の編者に資する全巻に精義純忠の英

氣なる 時代精神を釐革し各自見解を異 死生の解釋は一種の哲理を含めて

世道人心を裨益する甚大 實益興趣双絶好箇の教訓

書たるべく更に史外曠古の史書得易からざる 自叙傳とも書ふ

●附録 伊藤公爵訪問記 勝海舟伯自記の斷腸の記

文學博士 井上哲次郎君  
文學士 有馬祐政君

合著

●發行所

博文館●

# 武士道叢書

全三冊 洋裝菊判  
紙數千六百頁  
正金五拾錢  
郵稅各金拾貳錢

我國古來より武士道を重ぶるの書世に尠からずと雖も斷篇零冊にして未だ集めて大成せるものなきは是れ一大缺點なり井上有馬兩先生茲に見るあり即ち幽を隅き秘を搜りて良書數十篇を得、校訂して三卷となし以て世に問ふ所あらんとす、國家に志あるの諸士必ず一讀せざるべからざるの寶冊也。

●日本武士道史 文學士 嶋川龍夫君編

全一冊 洋裝菊判  
紙數三百七十二頁  
正金八拾錢  
小包金八錢

●黒木軍百話 黒木軍通譯官 來原慶助君著

全一冊 洋裝菊判  
寫眞版八頁 挿八  
正金四拾錢  
郵稅金六錢

●露軍將校 旅順籠城實談 遼東 麗水君著 伊藤昌樹君著

全一冊 洋裝菊判  
紙數二百九十四頁  
正金四拾八錢  
郵稅金八錢

●類書說小家名諸るせ

●換菓篇	●酒道樂	●大蠻勇	●地中の秘密	●捕鯨船	●地底探検記	●短編ゴロッキー集	●ツルゲネフ集	●立派黄金村	●小説ひとりぼつち	●小公子	●十五少年	●絶島漂流記	●沙翁物語十種	●新社會劇	●史劇十二曲
鏡花外十四君作	村井弦齋君著	江見水陸君著	江見水陸君著	江見水陸君著	相馬御風君著	相馬御風君著	吉江孤雁君著	司馬亨太郎君著	河井晴子共譯	若松殿子女史譯	森田思軒君譯	高橋光威君譯	小松月陵君譯	土居春曙君譯	山崎紫紅君譯
全一册	全二册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
正價金六拾錢 郵税金八錢	正價各五拾五錢 小包各八錢	正價金五拾錢 郵税金八錢	正價金五拾八錢 郵税金八錢	正價金參拾五錢 郵税金六錢	正價金四拾五錢 郵税金六錢	正價金四拾五錢 郵税金六錢	正價金四拾八錢 郵税金六錢	正價金四拾五錢 小包金八錢	正價金六拾五錢 郵税金八錢	正價金參拾五錢 郵税金八錢	正價金四拾錢 小包料八錢	正價金四拾五錢 郵税金六錢	正價金六拾五錢 郵税金八錢	正價金六拾五錢 郵税金八錢	正價金九拾五錢 郵税金八錢

●博を評好一行發館文博●

●紅葉全集	●眉山全集	●獨歩全集	●露伴叢書	●澁柿叢書	●柳浪叢書	●花袋叢書	●水蔭叢書	●小説十二人集	●北米の花	●小藤村集	●近作十五篇	●魔宮殿見聞記	●奧様氣質	●あめりか物語	●一葉全集
故尾崎紅葉君著	故川上眉山君著	國木田獨歩君著	幸田露伴君著	塚原澁柿君著	廣津柳浪君著	田山花袋君著	江見水陸君著	秋聲外十一君作	田村松魚君著	島崎藤村君著	田山花袋君著	吉田博君著	福田琴月君著	永井荷風君著	樋口一葉女史著
全六册	全四册	全二册	全二册	全一册	全二册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
正價各壹圓八拾錢 小包料拾錢	正價各壹圓八拾錢 小包料拾錢	正價各金貳圓 小包各拾六錢	正價各金貳圓 小包各拾六錢	正價各金貳圓 小包各拾六錢	正價各金貳圓 小包各拾六錢	正價金貳圓 小包料拾六錢	正價金貳圓 小包料拾六錢	正價金八拾五錢 小包料八錢	正價金壹圓拾錢 小包料八錢	正價金七拾五錢 郵税金八錢	正價金七拾五錢 郵税金八錢	正價金九拾錢 小包料八錢	正價金參拾錢 郵税金四錢	正價金六拾五錢 郵税金八錢	正價金四拾錢 小包料八錢

奥村繁次郎君著

●發行所 博文館●

家庭に於ける

# 吉凶百談

全一冊  
洋裝四六判美本  
紙數三百六十五頁  
正價四拾五錢  
郵稅金六錢

中村青江君編(三六判一六四頁)

## 新案福引

附給入地口百番  
内遊戯

正價金拾八錢 郵稅金四錢

本書は奇想天来の珍趣妙案一粒選りの福引解題五百餘を集め二十一種の類別を立て景品を配當せるもの尙附録として繪入地口百番内遊戯等をも添えたれば何づれの家庭にも備ふべき珍書なり

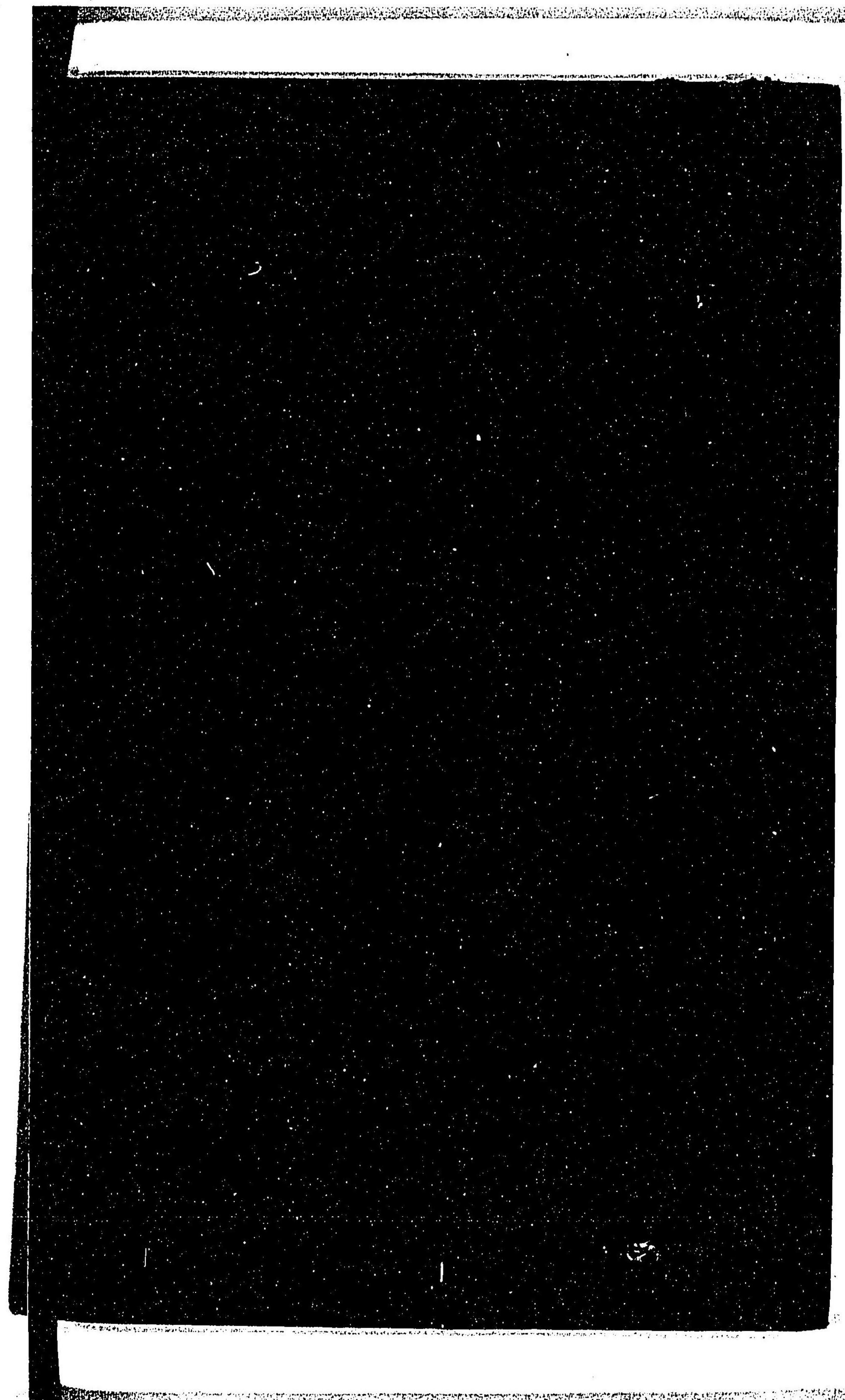
文藝俱樂部記者 海賀變哲君著

日本文學遊戯大全 正價金五錢 郵稅金六錢

### (次目書本)

- 迷信とは如何なるもの乎○身體に對する迷信○動作に對する迷信
- 食物に對する迷信○衣服に對する迷信○吉日と悪日の門戸に掲出する御守に對する迷信○家内に物品を吊し置く迷信○動物に對する迷信○植物に對する迷信○妊娠及び出産に對する迷信○葬式に關する各地の迷信○厄年と有卦無卦○火に對する迷信○不思議と稱する迷信

264  
435



096817-000-1

特10-392

侠客伝

博文館編集部/編

M43

DBS-0541

